

「早川たかしの新型コロナ状況への“遊び力”提案」を受けてのドキュメント【第5弾】

今だから出来ること

「親子で一緒に遊ぶ」（第一弾の提案）を実践した酒井家の物語を載せます。母と娘（大学生）がコロナ禍の最中、体験を素直に綴ったレポートです。その中には、よくある「悲壮感」や「疑心暗鬼」や「不安感」が漂っていません。それどころか、家庭が「遊ぶ」関係から生まれる「安全基地」の役割がしっかり果たされています。そこから生まれるそれぞれの心の動きが生き生きと描かれています。



「家族と一緒に遊ぶ」ことの大切さを再認識した大学生の私

私は、本当は今頃イギリスで交換留学を存分に楽しんでいるはずでした。私は小さい頃から外国で生活するのが夢で、それがようやく叶い、充実した毎日を送っていました。6月までの残りの数ヶ月も、様々な経験を積み、達成感と満足感を得て帰国するとばかり思っていました。しかし、イギリスを含むヨーロッパでコロナウイルスの感染が拡大し、残念ながら、3月末に緊急帰国せざるを得なくなりました。自宅で2週間の隔離生活を送った

後、日本でもコロナウイルスの状況が深刻化したため、家から出ることが出来ない毎日を送っています。

しかし、家族五人が毎日一緒にのんびりと会話したり、ご飯を食べたり、ボードゲームをしたり、散歩をしたりする生活を、およそ数年ぶりに送っています。大学に入学後、もう家族と長期間過ごすことはないのでは、と少し悲しんでいた私ですが、今回思いがけず、家族との時間を沢山とることができ、理由はどうであれ、嬉しい気持ちもあります。

家族との時間を大切にしたいと思ったきっかけ

私は、小学生までは、早川先生が主催する遊酔亭で思いっきり遊んだり、家族とボードゲームや皿回し、ハイキングなどを楽しんだりする毎日を過ごしていました。しかし、中学生、高校生になると、先のことに対する不安から、提出しなければいけない課題やテスト勉強に追われ、家族と一緒に過ごす時間を後回しにしていました。母親が主催するいたずら一ずの良さも分かってはいましたが、自分のタスクをこなすことを優先してしまっていました。積極的に参加していなかったことに関しても、問題意識はありませんでした。

しかし、コロナウイルスによって、当たり前のように思っていた生活が突然失われたことに、非常にショックを受け、考え方が変わったように思っています。イギリスの突然のロックダウンは、様々な国籍の友人と話したり、大学に通って授業を受けたりする充実した生活を奪っていきました。学生街としてにぎわっていた街は、ゴーストタウンと化しました。仲良くなった友人に感謝やお別れの言葉も、直接伝えることができませんでした。一方で、この経験を通して、今ある時間を精一杯楽しんだり、目の前にいる人たちとあた

たかい時間を共有したりできることが本当に幸せなことであるということに気づきました。
そして、実家で過ごすことができる今を大切にしたいと強く思うようになりました。

家族と過ごす中で感じていること

最近、久しぶりに剣玉やボードゲームといった遊びをやってみて、遊びの面白さに胸を躍らせる毎日です。家族それぞれが、個人で勉強したり、ご飯をつくったり、映画を見たりしている時間ももちろんありますが、家族が一緒になって何かをしているときに、私の家族は皆一番笑っていると思います。また、私を含め、私の兄弟姉妹は年を重ね、大人に近づいていますが、家族皆で一緒に遊ぶと、幼い頃に戻ったかのように、皆笑ったり、悔しがったりしています。先日は、14歳の妹はゲームに負けて泣いてしまいました。反抗期まっただ中 18歳の弟は負けて悔しがり、お茶碗洗いを手伝う代わりにもう一度勝負しようと母親にせがんだりなんかもしています。父親なんて 50 を過ぎても未だに、負けると悔しがって不機嫌になります。泣いたり、怒ったり、嬉しがったりする様子を見ていることも面白いです。このように、心の底から笑いあったり、家族といろいろな感情を共有したりすることは、エネルギーを与えてくれるなど実感します。家族と一緒に夕飯を囲む、そんな当たり前のような時間でさえも、とても楽しく幸せなことだなのと思うのです。



早川先生がいつも言うておられるように、家族と一緒に遊んだり、会話したり、笑い合ったりすることは、非常に心を豊かにしてくれるなど、改めて感じています。家に引きこもらなければいけないこのご時世、どのようにして、毎日に面白さや楽しさを見いだしていくのか。一緒に料理をしたり、散歩をしたり、ボードゲームをしたりすることによって、家族と一緒に遊んで楽しむことの素晴らしさを再認識できると思います。家族の新しい一面を発見できるかもしれません。そして、コロナウイルスに対する不安を忘れるくらい、安心感や温かい気持ちで満たされると思います。

この先が見通せない不安でいっぱいな毎日だからこそ、家族で遊ぶ時間をつくって、心も身体も元気に、コロナに打ち勝っていけたらいいなと思います。

“コロナ禍”で生きた“いたずらーず”の精神

(遊びの子育てサークル「いたずらーず」代表 酒井 久美子)

「いたずらーず」誕生期

早川たかし先生の「子どもイタズラ村・遊酔亭合宿」の魅力にとりつかれた6歳の娘と4歳の息子。どちらかといえば、学校や保育園では大人しい人見知りする我が子たちだったが、遊酔亭では、スタッフのお兄さんたちに懐き、家でも見せないような表情で遊んでいた。

そんな様子がとても印象的だったので、遊酔亭で味わえるような特別な空間を我が家で作ることができないかと自宅を開放し始めたのが10年前。我が子の友達とそのお母さ

ん達を誘って「いたずら一ず」を立ち上げた。先生に遊び師としてうちに来てもらい、子どもたちと一緒に遊んでもらったり、時には悩める親たちに子育て談義をしてもらったりしてきた。けん玉、皿回し、水遊びに、じゃれつき遊び、かくれんぼやおにごっこことよく遊んだ。時には科学遊び実験もした。我が家の階段の手すりが壊れ、障子の棧が折れ、雨どいが抜けるなどの破損がそれを物語っている。

「いたずら一ず」少年期の回想

「いたずら一ず」を子育ての軸におきながらも、子どもたちが、中学生や高校生になると部活動で家を空けることが多くなっていった。まして、誰かが受験期に入ると、勉強の邪魔にならぬようにと笑う時さえ遠慮しながら声を潜めていた。いつも誰かのスケジュールに合わせて追われるような家庭生活をずっと続けていたように思う。「いたずら一ず」では大切にしている遊びだったが、家族全員でボードゲームを囲んだり、けん玉をしたり、皿回しをしたりすることが、子どもが大きくなってから、ここしばらくなかったことに、娘の感想文を読みながら改めて気づかされた。

娘がイギリスから帰国してから、家族だけの時間が続いている。一緒に散歩をしたり、家の掃除をしたり、ドラマを見たり。子どもたちからは、「小さい頃作ってくれたあのおやつを作ってよ」とせがまれ、一緒におやつ作りをすることもある。ボードゲームも一度始めるとなかなか終わらない。「もう1回」とねだられるのだ。

そういえば、子どもが小さかった時には、いつも「もう一回、もう一回」とエンドレスに遊びをせがまれていたなあと懐かしい記憶が蘇る。そんな子どものかわいいお願いに付

き合いながら生活していたことが、かけがえのない時間だったことを今さらながら思い知らされる。娘が東京で生活を始めた時、巣立つことを喜びながらも、家族の形が変わっていくことに寂しさを感じていた。だからこそ、非常事態で不安な気持ちになる毎日だが、思いがけずじっくり子どもと過ごすことができる時間を与えられた今この時を、感謝して楽しみたいと思っている。

“コロナ禍”中の遊び時間

提案「遊びは、人のエネルギーになる」。それは、小さな子どもだけではないと実感する。

“家族で一緒に”ボードゲームをした後、自粛生活の毎日で時間を持て余し、スマホを手放せない大学生の息子が、急に部屋を片付け始めたり、大学のオンライン授業のレポートをやり始めたりする。ダラダラしている日々が続くとついつい注意ばかりしてしまう私に、息子は動じず知らん顔。それなのに、一緒にゲームをした後は、なぜか自ら動き始める。遊びが、心をしゃきっとさせるのか？遊びは、前向きな気持ちにさせる特效薬のようだ。息子にはすごい効き目がある。イギリス帰りの娘にも、「お母さんは、うるさく注意するより、毎日遊んだほうが、絶対いいよ。嬉しくなったら、子どもは勝手に動くよ」などと、子育てアドバイスされるくらいである。

遊びにも、子どもにも教えてもらうことばかりの今日この頃。不安な今だからこそ「遊び心をもって、いかに生きるか、どんな工夫ができるか」と「子どもイタズラ村」の実践から長年教わってきたことを大切にしながら、生活していきたいと思っている。さてさて、明日はどのボードゲームをしようかな・・・。